

一般

2020年度も波乱の幕開けとなりました。コロナ感染がピークを過ぎたということで各所で規制緩和されつつありますが、第2波、3波の恐れもあり、まだまだ注意が必要な毎日です。海外に渡って会員同士が交流するというサーバスの活動はお手上げ状態です。心配なく旅行できるようになるのはいつの日でしょうか。コロナ後の社会の変化について問われるようになりましたが、コロナ後のサーバス活動についても考える必要がありそうですね。

中国四国支部会報 2020年7月号をお届けします。本来であれば、最近のホストあるいはトラベラー活動報告となるのですが、今回は、思い出のホスト/トラベラー体験と題して、少し前の経験を書いてもらうことにしました。この宝物のような体験を、ぜひシェアしていただきたいと思います。



呉、豊島のレモン

日本サーバス中国四国支部 支部長 U.T.

本号の内容

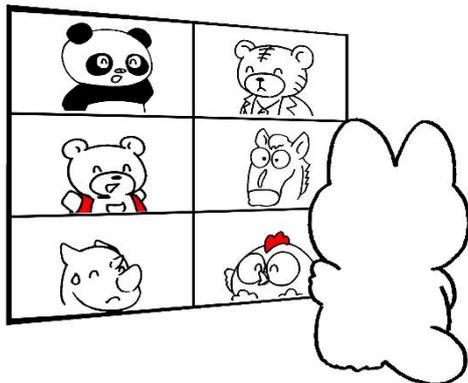
- | | | |
|---|-----------------------|------|
| 0 | ごあいさつ | |
| 1 | オンライン支部会への道のり | U.T. |
| 2 | 思い出のホスト/トラベラー体験 | |
| | (1) カナダで伝えた広島のことろ | S.S. |
| | (2) コロナ自粛の中でつれづれなるままに | H.T. |
| 3 | お知らせとお願い | |

1 オンライン支部会への道のり

U.T.

5月31日（日）、2020年度最初の支部会をオンラインで行いました。アプリはZoomです。Zoomは、LineやSkype、Messengerなどと違って、参加者がアカウントを取る必要がなく、主催者が送付した招待URL(<http://>で始まるインターネット上のホームページの住所)を開くだけで始められるので、決めました。無料版でも100名まで参加できるので、学校や会社の会合などで人気があるようです。

さっそくZoomのサイトから最低限の知識を仕入れ、主催者経験者の友人に助言してもらい、まずは支部会員の一人と練習し、次に支部会員に呼び掛けて数人でお試し会を催し、お試し会でうまくいかなかった会員ともう一度個別にやり直したり、2回目だったり、スマホだったりすると勝手が違うこともあるので、私の姉や娘に頼んで試してみたりと、しばらくはZoomに明け暮れました。



そしてついに支部会開催予定だった5月31日に、オンライン支部会を開くことができました。参加者7名。いつもの支部会出席者の人数です。議題を話し合い、久しぶりに顔を見ながら近況報告をし、旅行のお土産などを見せ合い、最後には歌まで飛び出して、楽しく2時間の会を終えました。会に間に合うように、PCのカメラとマイク

の環境を整えてくださった方、当日私が不慣れなためうまく誘導できず、何度もトライして入ってきただけの方、ありがとうございました。事情でさらに2回支部会を開かざるを得なかったのですが、会を重ねるにつれ慣れてきて、手早く進行できるようになりました。正に習うより慣れろ、ですね。辛抱強い支部会員の皆さんのお陰です。もちろん、オンライン特有のリスクはありますが、出かなくても顔を見て話すことのできるオンライン会議はおおむね好意的に受け止められたようです。

新型コロナ感染症の先行きが不透明なこの時期、無理をせず会そのものを中止して、メールで代用することも考えました。ただ、中国四国支部にはたとえ苦手なITに挑戦してでも、どうしても支部会を開いておきたい理由がありました。支部会員同士が顔を合わせて話をし、気心を知っておくこと

がいかに大切なことなのかを身に染みて知っている支部だからです。サーバスの良さは実際に海外の会員をお泊めして普段の生活を見てもらい、全世界の会員同士の理解を深めることです。しかし、それができない今、できることをしてサーバスの灯を絶やさないようにしていきたいと思っています。次回は、海外のサーバスの会員で支部会員の長年の友人である方をゲストに招いて、中国四国支部とオンライン交流会を開く企画が進んでいます。支部会員の一人がお世話係になります。とても楽しみです。



② 思い出のホスト/トラベラー体験

カナダで伝えた広島のことろ

S.S.

残念ながら、現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、サーバスの活動ができない状況になっています。私は自粛環境の中で、ふと立ち止まっていろいろな事を考える時間を持つことが出来ました。そして今までのサーバスの活動をどうして、お会いした人々、経験が何と素晴らしかったかという事に気づきました。そんな経験の中で、自分としてはとても頑張った出来事をお話ししたいと思います。



2017年、40歳も違う大学生の友達と2人で、カナダとニューヨークの旅をすることになりました。私事で恐縮ですが、実は私は3年前に、6年かけて大学を卒業しました。この旅はいわゆる卒業記念旅行だったのです。そして、以前私が受け入れた3人のサーバスメンバーとの再会の旅でもあったのです。この旅の準備をする中で、心の中に秘めた希望がありました。それは、滞在する予定の3か所のどこでもいいので、許されるのなら、広島資料館の平和証言をしたいという力強い希望がありました。

事前にその件について3か所のサーバスメンバーに打診をしたら、1番目のメンバーは

人を集めるには日にちがない、また3番目のニューヨークのメンバーは原爆について近所の人々の反応があまり良くないと思う、と断られました。その中で、2番目の滞在予定のカナダの Deep river に住んでいるサーバスメンバーがその場を作ってくれることになりました。

その町、Deep river は核エネルギーを研究するカナダ原子力会社があり、核産業を経済的基盤にする街であることが後でわかりました。Deep river に到着して2日目の晩6時から、その会合は始まりました。次々と人々が来て、内心少し不安になりました。20人位の人が、熱心に私の話を聞いてくれました。ほとんどの人が広島を訪問したことがないようだったので、私は、資料館、平和公園について説明をして、またその公園にある数か所の碑について説明をしました。そして、被爆した子供を思う母の立場から描かれた、「広島之母」という video をみてもらいました。大方の人がそれを好意的に見て頂き、その人たちから励ましの言葉を頂きました。また、その中に、カナダにも被爆者がいて、その人たちの苦勞、状況等を話して下さった参加者もおられました。また、私の話の始めから終わりまで、涙を流して聴いておられる若い女性に目が止まりました。その方は、カナダに留学された後、カナダ人と結婚された日本女性だったのです。後に分かったのですが、彼女は数年前に自身の長男を事故で亡くしておられたのでした。その深い悲しみの経験をしておられたから、その被爆者の母の気持ちも深く心に入ったのだと思います。後になって「ルナと光の天使」という絵本を描き、出版されました。その方とは今でも交流を重ねています。

今、Deep river 在住のサーバスの友達の尽力と参加して下さった人々により、実現した会合にとっても感謝をしています。私は広島ピースボランティアとしてあの当時3年目位の、まだ未熟なガイドだったのに、日頃からそんな機会があったら是非ヒロシマの被爆者の思いを伝えたいという、大それた思いを持っていました。少し勇気を出して、一生懸命にヒロシマのことをあの会合の参加者に紹介でき、そしてヒロシマのこころを少しでも伝えることが出来たなら、とても幸せな事だと思っています。

コロナ自粛の中でつれづれなるままに

コロナさん 困難さんを連れてきた

来し方行く末 思いぞ 馳せなむ

サーバス会員として後何年続けられるだろうか？基礎疾患を抱える後期高齢者の自分としては、海外旅行はもう考えられないならば今までサーバス交流してきた訪問者や会員との印象深い言葉や行いを振り返ってみるのも良いかなと考え、思い出しながら、数件あるうちの1件をしたためることにしました。

その人の名は H.S.と言いました。今は LOI も残っておらず滞在された正確な年月日も分かりません。2002 年から 2004 年までの間だったと思います。その方が東ドイツ出身のニューヨーク在住アメリカ人であることを覚えています。廿日市の古い我が家に滞在した最終日、半畳弱のバスタブ付シャワールームで約 5 分で全て用を済ませてすぐ出発できるよう身支度を整えて私を待ちました。これは災害時の避難所での生活にもすぐ対応出来る立ち居振る舞いだったと、今になって感心しています。

一緒に宮島へ行き島を一巡した後、浜辺に降りて貝拾いをしながら彼女はぽつりぽつりと身の上を語り始めました。東西分断されていた昔、彼女は 18 ? 歳で東ドイツを脱出しました。

歴史： 1961 年に東西ドイツを分断するベルリンの壁が作られた。その 2 年後東ドイツとベルリン市との間で「ベルリン通行証協定」が出来た。一時的に西側市民が東側を列車で訪れることが可能となり、列車の往来が年に 2、3 度あった。

H.S. の回想： 東独の何も無い町に暮らしていた H は、後ろ髪が引かれるように心配な身内がいなかった。実の兄と継母とのバラバラな暮らしで、孤独であった。H はそれで西ベルリンに行くことを決心した。西ベルリンへ戻る列車が東ベルリン駅に停車した時、研修旅行を済ませたらしき高校生のグループが改札口に集合していた。H はそのグループに紛れ込んで列車に乗り込んだ。車内で検閲官が切符を確認に来た。咄嗟にトイレに逃げ込んだ。トイレには男子高校生が入って

いたが、その学生は無言でいてくれた。トイレを出ても何知らぬ顔でいてくれた。往復する検閲官がもう一度通る時には数センチの距離ですれ違ったが、気付かれずに済んだ。最後は降りる時、高校生の研修グループの一員として改札口を通り抜けた。

西ベルリンには1年余りしかいなくて、アメリカに渡ることを決心した。英語も出来ずお金もなく家政婦のような仕事をして何とか生活した。アメリカ人と結婚し3人の子供を儲けた。そのアメリカ人とも別れた。長男は画家になりエクアドル出身の女性と結婚していまも活動している。2人の女の子はそれぞれ成人して母親を助けた。Hはコンピューターを学び、銀行員となった。ゴールドマンサックス銀行に就職して一人で3人の子供を育てた。「ニューヨークの銀行で昼間接客して書類を作り、インドにメールで送信するのです。ニューヨークの夜間はインドでは昼間だから書類の計算をインド人が全てやってくれます。」 (宮島の浜辺で鹿と遊ぶ H ↑)



翌朝出勤した時、書類は全て整っていて、客に引き渡す、それが可能になったのですよ、現在の世界はね」 こういう時代になってやっと彼女は余裕ができたのでしょう、日本にやってきました。彼女を宮島口改札口で JR に乗るのを見届けて別れました。

2005年頃ある方が「New York Times の一面にサーバスのことを述べた記事が出ている。H.S. が主人公です。どなたか H を泊めた人はいないでしょうか」と一斉メールで尋ねておられました。当時公民館活動に熱中していた私はその問いかけにも答えることなく H のことを忘れ去ってしまいました。ずっと続けて H と交流していたら私のサーバス活動も少し違ったものになっていたかもしれません。

今回初めて H.S. のホームページを開いてその後の彼女の行動を知ることができました。H は

マラソンランナーになったり、アフリカのキリマンジャロ登頂を目指したりしてアフリカの女性の自立支援をして appeal しています。彼女は、自己啓発する人、求める人、という印象を持ちました。コロナ禍の中であって、社会が変わろうとしている今、真っ先に彼女を思い出しました。前向きな人、独学で自立した人、H に学ぶことがあるように思います。



3 お知らせとお願い

- 1) **2020 年度国際フェスタについて:** 支部会で数回話し合った結果今回は参加を見送ることになりました。会員勧誘については、各自それぞれのやり方で努力を続けましょう。
- 2) **次の予定:** ニュージーランドの会員 D さんとの交流会 7月5日(日)
- 3) **お礼:** 4月に支部会員より、寄付金1万円をいただきました。どうもありがとうございました。また、会報原稿の執筆と校正のご協力ありがとうございました。今後もいろいろ工夫して楽しいものにしたいと思いますので、編集委員になってくださる方を求めています。力をお貸しください。

(U.T.)